

〔投稿〕

近代上海の路名と戦争

— 歴史社会言語学

彭 国躍 (ほう こくやく)

一 はじめに

十九世紀から二〇世紀にかけて上海の路名は目まぐるしく移り変わっていた。その変わり様は戦火の絶えない近代中国社会の変化、上海という町の激しい変貌ぶりと共振していた。

上海の路名には、一八四〇年のアヘン戦争後に「憶定盤路」(Edinburgh、イギリス公爵の名)、「寛克路」(Kirk、スコットランドの教会名)、「霞飛路」(Joffre、フランス將軍の名)、「莫利愛路」(Molier、フランス劇作家の名)、「百老匯路」(Broadway、ニューヨークの歓楽街名)などが登場し、一九一一年の辛亥革命後に「中山路」(孫

文のあざな)、「民国路」(中華民國)、一九三七年の日中戦争時には「松井通」(日本軍司令官松井石根の名)、「明治通」、第二次世界大戦後の国民党政權下では「中正路」(蔣介石のあざな)、「魏德邁路」(Wedemeyer、在上海米軍司令官の名)、一九四九年の内戦終結後には「延安路」(共産党革命根拠地の名)、「人民路」などが出現した。

本稿では、近代上海における路名の通時的变化と、戦争がもたらす地政学的変容および時の為政者たちの路名管理における政策的意図との関係について明らかにしたい。

二 伝統的な上海路名

十八世紀頃の上海地図を紐解くと、そこには伝統的な道



路名が記されている^(註)。それを整理すると、大きく二つのパターンに分けることができる。

一つは「呉家弄、劉家弄、康家弄、趙家巷、杜家灣」などのように道路沿いにある屋敷、由緒ある家柄の姓に基づく命名で、もう一つは「果子巷（果物屋）、篾竹街（竹細工店）、面筋街（食料品店）、彩衣巷（仕立て屋）、館驛路（運送馬休憩場）、王医馬弄（獣医）、洋行街（貿易商）」など道路沿いにある店、施設などに基づく命名である。

このような伝統的な路名は、政策的に命名された痕跡が見えず、十三世紀の宋末から十八世紀の清代にかけて町の緩やかな変化に伴って徐々に形成されたものである。

三 アヘン戦争後の上海路名

三一 英米租界の路名

一八四〇年にアヘン戦争が勃発し、一八四二年に清朝政府とイギリスとの間で上海を含む五つの都市の通商開放を認める「南京条約」が締結された。一八四五年十一月に上海におけるイギリス人の居留地域——租界が画定された。一八四六年イギリス租界の西境界にあたる道が「界路」

(Boundary Road)、税関事務所のある道が「海関路」(Customs House Road)と命名された。これらは事実上上海租界における最初の道路命名となる。

一八四六年から一八六五年までの二〇年間、租界が拡張され道路が増築されることにより、さまざまなタイプの道路名が現れた。「派克弄 (Park Lane)、寛克路 (Kirk's Avenue)」などのような英語の音訳タイプ、「教会路 (Mission Road)、領事館路 (Consulate Road)、橋街 (Bridge Street)」などのような英語の意訳タイプ、「石路 (Shackloo Road)」のような上海語タイプなどが出現した。

一八四八年から英租界の東北部にアメリカ租界が形成され、一八四九年にその西南部にフランス租界が成立した。一八六〇年頃になると、つながる一本の道路に隣接する租界地で別々の名前がつけられ、路名をめぐる列強間のトラブルが頻発した。一八六二年英租界の管理機構「工部局」会議で当時英代理領事メドハースト (W. H. Medhurst) により「中国の省名を南北方向の道に、市名を東西方向の道に適用する命名法」が提案された。英米共同租界成立後

路名	命名年
麥特拉司路 (Madras インド南東部の都市)	1902
孟買路 (Bombay インド西部の州)	1908
倍耐爾司路 (Benares インド北部の都市)	1912
開答路 (Quetta パキスタン西部の都市)	1908
客拉契路 (Karachi パキスタン南部の都市)	1911
頼霍爾路 (Lahore パキスタン北東部の都市)	1913
客勃爾路 (Kabul アフガニスタンの首都)	1911
科隆布路 (Colombo スリランカの首都)	1908

表1 英植民地による命名

の一八六五年九月に「南京条約」記念として「派克弄」が「南京路」に改名されると同時に、同提案に基づく次のような路名変更が実施された。「界路」↓「河南路」、「海関路」↓「漢口路」、「寛克路」↓「寧波路」、「教会路」↓「福州路」、「領事館路」↓「北京路」、「橋街」↓「四川路」、「石路」↓「福建路」。それは上海道路

史上初の政策的な大量改名となる。

ところが、一八六五年に採用された中国地域名は、イギリス軍が北上した時に占拠した地域の地名が大半を占めた。その後インド、パキスタンなどの英植民地の地名に基づく路名(表1)が多く使われたことをあわせて考えると、英米租界内の路名の選定には、植民地支配を記念するという政策的な意図があったことは明らかである。

三二 フランス租界の路名

英米租界の路名に地名が多く使用されたのと対照的に、フランス租界の路名には、人名が大量に使われた。上海駐在フランス総領事の名(表2)やフランス系カトリック神父の名(表3)の外に、フランス租界の管理機構「公董局」のメンバーやフランスの著名人およびフランスに寄した外国人の名などが多く使用された。

キリスト教関連の路名として、かつて英米租界にも「教会路」(一八五〇年命名)、「教堂街」(一八五五年命名)や「文監師路」(William Boone、上海米聖公会主教、一八四八年命名)などがあったが、フランス租界におけるキリスト教関連の路名には、その出現時期(十九世紀後半〜二〇世紀の前半)と命名パターン(中国式の姓による神父名)において共通の特徴が見られる。それには第二次アヘン戦争後の中国におけるキリスト教の布教に関する歴史的变化が深くかかわっている。

一八五八年にフランスは広西での宣教師処刑事件などを理由にイギリスと共同出兵し第二次アヘン戦争(アロー戦争)を起し、清政府に「天津条約」を結ばせた。その条

約の中で初めてキリスト教の信仰、布教の自由が明記された。その条約がきっかけでキリスト教の布教活動が活発化し、同時に外国人宣教師が中国式人名を名乗るなど現地化が進んだ。表3のように、十九世紀後半から上海の路名にフランス系のカトリック神父名が次々と登場した背景には、第二次アヘン戦争と「天津条約」（一八五八年）によるキリスト教布教の自由化という社会的環境の変化が大き

路名	命名年
呂班路 (G. C. Dubail 1893年着任)	1902
李梅路 (V. G. Lemaire 1875年着任)	1906
巨額達路 (L. Ratard 1906年着任)	1907
愷白邇路 (E. D. Kraetzer 1885年着任)	1909
敏体尼蔭路 (L. C. N. M. Montigny 1848年着任)	1909
甘世東路 (G. Kahn 1913年着任)	1913
華格泉路 (R. Wagner 1888年着任)	1915
愛棠路 (Edan 1859年着任)	1926

表2 上海フランス総領事名による路名

路名	命名年
孟神父路 (Père Meugniot)	1882
金神父路 (Père Robert)	1907
姚主教路 (Mgr. Robert)	1907
薛華立路 (Stanislas Chevalier)	1912
勞神父路 (Père Froc)	1927
古神父路 (Père Huc)	1930
趙主教路 (Mgr. Maresca)	1930
杜神父路 (Père Dugout)	1931

表3 仏租界内の神父名による路名

く影響した。フランス租界では、この他に「蒲石路 (Bourgert)、在上海フランス人弁護士)、環龍路 (Vallon、フランス人パイロット)、高乃伊路 (Cornelle、フランス人劇作家)、馬斯南路 (Massenet、フランス人作曲家)」など多くのフランス著名人の名が使われた。

四 辛亥革命後の上海路名

一九一一年に辛亥革命が起り、十二年に中華民国が成立し、孫文が南京で臨時大統領に就任した。辛亥革命後、上海の道路には次頁の表4（左側）のように辛亥革命の理念と思想（中華民国、三民主義、五権憲法、救国、光復など）や辛亥革命のリーダー（孫文、黄興、陳其美）、中華民国の首都南京（旧名金陵）に因んだ路名が相次ぎ誕生した。

一九二八年に蒋介石は北伐戦争を終結させ、二九年七月に租界の東北部に新しい市街地の建設が計画され、孫文の「建国大綱」に基づく「大上海都市計画」がスタートした。新市街地道路の建設に従い、表4

路名	命名年	路名	命名年
民国路	1913	民壮路	1931
中華路	1914	民生路	1932
新民路	1914	民府路	1933
民興路	1915	国本路	1931
施政路	1916	国济路	1931
中山路	1918	国和路	1931
金陵路	1921	市和路	1931
西光復路	1924	市京路	1933
東光復路	1925	政同路	1929
三民路	1928	政寧路	1931
五権路	1929	政通路	1933
救国路	1928	府南路	1931
黄興路	1930	府内右路	1931
其美路	1931	府東外路	1931

表4 辛亥革命後の路名

(右側)のように、「民国市政府」中の一字を頭文字とする路名群が続々と誕生した。

ところが、一九三二年一月に、「一・二八事変」(第一次上海事変)が起こり、日本軍が上海に上陸し、新都市建設は戦火が差し迫る中余儀なく中断された。

五 日中戦争時の路名改正

一九三七年七月に日中戦争が勃発し、八月に「八・一三事変」(第二次上海事変)が起こり、日本軍が新市街区全域を占領した。一九四〇年三月に日本は、蒋介石の国民党政権、毛沢東の共産党政権に対抗し、第三の勢力として汪

民国政府 1922~31年	日本占領軍 1937~39年	民国政府 1922~31年	日本占領軍 1939年
其美路	→ 松井通	民猷路	→ 北一条通
閘殷路	→ 長谷川通	民府路	→ 北二条通
五権路	→ 及川通	民壮路	→ 北三条通
淞滬路	→ 柳川通	民彝路	→ 北四条通
三民路	→ 畑通	民約路	→ 北五条通
黄興路	→ 加納通	民慶路	→ 北六条通
淞滬路	→ 倉永通	政治東路	→ 南一条通
国和路	→ 近衛通	政府路	→ 南二条通
三民路	→ 大正通	政徳東路	→ 南三条通
翔殷路	→ 明治通	政立路	→ 南四条通
市京路	→ 金澤通	政衷路	→ 南五条通
国京路	→ 岐阜通	政通路	→ 南六条通
国光路	→ 静岡通	政揚東路	→ 南七条通
国济北路	→ 仙台通	政益路	→ 南八条通

表5 日本占領下の道路改名

兆銘政権を擁立した。一九四一年十二月に太平洋戦争が勃発し、日本軍が共同租界を占領した。一九四三年一月に汪政府は日本と「日華共同宣言」を発表し、七月にフランス租界を、八月に共同租界を相次ぎ接收した。日中戦争勃発後の六年の間に上海の路名に次のような変化が現れた。(1) 日本式路名の誕生、(2) 日本式路名の変更、(3) 租界路名の全面改正。

日本は、一九三七年十一月に上海占領後まもなく新市街区において当時の司令官の名（松井石根、長谷川清、及川古志郎）を使って路名改正を行った。一九三九年になると、さらに軍人（司令官柳川平助、畑俊六と戦死した連隊長加納治雄、倉永辰治）、政治家（首相近衛文麿）の名前、日本の年号、地域名、道路名などを使って大規模な改名を行った。

ところが、表5のような日本式路名のほとんどは一九四〇年に元の中国式名に再変更された。これは日本が上海を實質占領しているながら道路の命名に関しては汪兆銘政権に委ねたことを意味する。日本が自ら支援する汪兆銘政権に対する一種の政治的譲歩と見ることができる。

一方、汪兆銘政権は日本式路名を改正し、民国政府の旧名を復活させると同時に、日本の「大東亜共栄」政策への同調を示す「共栄路」を命名し、「中日協同建立新東亜」中の一字を頭文字とする命名法を採用し、それに基づき表6のように「協儀路、協睦路、協平路、協贊路」など「協」をキーワードとした路名群を新たに登場させた。

さらに、汪政権は一九四三年に旧租界路名に対して全面

改正を行った。そのきっかけは日本占領下の租界事務局の長だった岡崎勝男が同年五月二二日に当時上海市長秘書趙尊岳にあてた一通の手紙だった。その手紙の中で「旧租界地における英米人の銅像撤去と路名変更」に関する提案が出された。同年十月八日に上海市政府の訓令として二四〇本の旧租界路名の改正が一齐に公表された。

それまでの上海路名の改正はほとんど新路名の起用を目的としていたが、今回の旧租界地の改名は主に旧路名に残る旧政権、旧支配者の影響を排除することを目的としたものであり、上海路名史上もっとも大規模なものである。

汪兆銘政権 1939～40年命名		蒋介石政権 1945～46年改名
共榮路	→	翔殷路
協儀路	→	国法路
協睦路	→	国權路
協平路	→	国順路
協成路	→	国粹路
協贊路	→	国法路
協力路	→	政宣路
協同路	→	政本路
協進路	→	政修路
協建路	→	政化路
畑路	→	逸仙路
長谷川路	→	閘殷路
松進路	→	其美路

表6 蒋介石政権の道路改名

六 第二次世界大戦後の路名改正

一九四五年八月に第二次世界大戦が終結し、九月に蒋介石国民党政権が上海を接収した。蒋政権は、接収後まもなく表6のように汪兆銘政権が命名した日本との協力関係を示す路名および汪政権が残した日本人名による路名に絞って改正を行った。そして表7のように「其美路」を復活させると同時に、「英士路」（陳其美のあざな）、「中正路」（蒋介石のあざな）、「林森路」（前国民政府主席の名）、「魏德邁路」（Wedemeyer、上海駐在米軍司令官の名）など国民党、アメリカ軍を記念する新しい路名群を誕生させた。大戦終了後、国民党政権は路名改正後間もなく、共産党との全面戦争に突入した。

七 内戦終結後の路名改正

一九四九年五月に人民解放軍が上海を占領し、十月に共産党が内戦で勝利し、国名が「中華民国」から「中華人民共和国」に変更された。それとほぼ同時に、「民国路」（一九一三年命名）が「人民路」に改名された。一九五〇年五

蒋介石政権 1945～46年命名	共産党政権下 1950年改名
中正中路	→ 延安中路
中正東路	→ 延安東路
中正西路	→ 延安西路
中正南一路	→ 瑞金一路
中正南二路	→ 瑞金二路
中正北一路	→ 石門一路
中正北二路	→ 石門二路
林森中路	→ 淮海中路
林森東路	→ 淮海東路
林森西路	→ 淮海西路
英士路	→ 淡水路
其美路	→ 四平路
魏德邁路	→ 邯鄲路

表7 共産党政権の道路改名

月二八日に表7のように蒋介石国民党政府に関係する路名に絞って改正が行われた。一九四九年三月に第七回共産党大会第二次分会上で、毛沢東は人民政府樹立に向けての六項目の注意事項を指示したが、その中の第五項は「党幹部の人名を地名、路名、企業名としないこと」となっている。そのため、一九五〇年の改名で使われた新路名には、共産党指導者の人名ではなく、共産党の革命根拠地名「瑞金、延安」や勝利した戦役名「石門、淮海、淡水、四平、邯鄲」などが登場した。

一九三四年七月に共産党軍が「北上抗日」を宣言し、南部の瑞金から西北部の延安まで「長征」と称する一万キロ

あまりの大移動を行ったが、一九五二年からの二年間に上海の路名に「遵義路、大渡河路、金沙江路、茅台路、婁山関路」など長征の経路に沿った地名が次々と誕生した。

八 結び

近代上海において、第一次アヘン戦争、第二次アヘン戦争、辛亥革命、日中戦争、第二次世界大戦、国共内戦などたび重なる戦争や政変が、繰り返し地政学的勢力図を塗り替え、頻繁な路名改正を引き起こしていた。さまざまな背景を持つ為政者たちが、道路の命名権を駆使して自らの影響力を誇示し、敵対勢力の影響を弱め、消し去ろうと努めていた。

近代上海における路名変遷の歴史には、このように激動時代における中国社会の変化が克明に刻み込まれている。

【注】

周（一九九六）「上海県城・清乾隆末年」の地図（一九頁）による。

【参考文献】

- 袁燮銘（一九九六）「工部局與上海路政」『上海研究論叢（2）』上海社会科学院出版社
蔡德金、李惠賢（一九九二）「汪精衛偽国民政府紀事」中国社会科学出版社

崔乃夫編（一九九〇）『中華人民共和國地名大詞典』（第一卷）商務印書館

時事調査会編（一九四〇）『現在時事常識辞典』教文社（戦時下資料事典）（第3巻）日本図書センター

上海档案館編（一九九〇）『日偽上海市政府』档案出版社

上海通社編（一九九四）『上海研究資料』上海書店

上海通社編（一九九四）『上海研究資料續集』上海書店

周振鶴編（一九九六）『上海歴史地図集』上海人民出版社

薛理勇編（一九九六）『上海掌故辞典』上海辞書出版社

薛理勇（二〇〇〇）『旧上海租界史話』上海科学院出版社

陳微琳、鄒逸麟、劉君徳（一九九〇）『上海地名志』上海社会科学院出版社

鄭祖安（一九九〇）『上海地名小志』上海社会科学院出版社

彭国躍（二〇〇七）『上海の道路命名年表——社会言語学的命名論の基礎研究』『人文学研究所報』（四七号）神奈川大学人文学研究所

劉景泉（一九九六）『中国抗日戦争人物大辞典』天津大学出版社

（神奈川大学外国語学部／社会言語学）

